

株式会社 翻訳センター 2023年3月期第2四半期決算説明資料

2022年11月

株式会社翻訳センター

(東証スタンダード 証券コード：2483)



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.

株式会社翻訳センター 代表取締役社長の二宮でございます。
本日は説明会にご出席いただき、誠にありがとうございます。
それではこれよりご説明を始めます。

本日のご説明内容

1

I. 2023年3月期第2四半期 業績

II. 事業戦略と進捗

III. 2023年3月期 見通し

本日のご説明内容をご覧のとおりです。

本日のご説明内容

2

I. 2023年3月期第2四半期 業績

II. 事業戦略と進捗

III. 2023年3月期 見通し

まず、2023年3月期第2四半期の業績についてご説明いたします。

1. 2023年3月期 第2四半期 業績

3

単位：百万円、%、円

	2022/3期	2023/3期	増 減	伸 率
	2Q	2Q		
売上高	4,968	5,238	270	5.4
営業利益	322	389	66	20.5
経常利益	331	390	59	17.9
親会社株主に帰属する四半期純利益	219	259	39	17.9
1株当たり四半期純利益	66.05	77.81	—	—

*2023年3月期2QにおいてはUS1ドル=124.52円で換算しています。

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2023年3月期第2四半期の業績についてご説明いたします。

2023年3月期第2四半期の売上高は52億3,800万、YoY5.4%増加、
同営業利益は3億8,900万、YoY20.5%増加、
同経常純利益は3億9,000万、YoY17.9%増加、
同四半期純利益は2億5,900万、YoY17.9%増加となりました。

本年5月に発表した期初予想と比べると売上は若干未達となりましたが、
各利益はすべて目標をクリアする形で第2四半期を終えることができました。

2. 貸借対照表

単位：百万円

	2022/3期	2023/3期 2Q	増 減
(資産の部)			
流動資産	6,311	6,186	△125
固定資産	861	898	36
資産合計	7,172	7,084	△88
(負債の部)			
流動負債	1,891	1,637	△253
固定負債	190	199	9
負債合計	2,081	1,837	△244
(純資産の部)			
I. 株主資本	5,068	5,203	134
II. 評価換算差額等	22	43	21
純資産合計	5,090	5,247	156
負債純資産合計	7,172	7,084	△88

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2022年3月期第2四半期の貸借対照表についてご説明いたします。

総資産は70億8,400万、負債は18億3,700万、
純資産は52億4,700万、YoYで1億5,600万増加となりました。

3. 損益計算書

単位：百万円、%

	2022/3期		2022/3期			
	2Q	売上比	2Q	増減	伸率	売上比
売上高	4,968	100.0	5,238	270	5.4	100.0
売上原価	2,613	52.6	2,763	150	5.7	52.7
売上総利益	2,354	47.3	2,474	120	5.1	47.2
販売費及び一般管理費	2,032	40.9	2,085	53	2.6	39.8
営業利益	322	6.4	389	66	20.5	7.4
営業外収益	16	0.3	15	0	△2.1	0.3
営業外費用	7	0.1	14	6	85.7	0.2
経常利益	331	6.6	390	59	17.9	7.4
特別利益	—	—	—	—	—	—
特別損失	—	—	0	—	—	—
親会社株主に帰属する四半期純利益	219	4.4	259	39	17.9	4.9

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2023年3月期第2四半期の損益計算書についてご説明いたします。

売上高は52億3,800万、Yo5.4%増加、
売上原価は27億6,300万、YoY5.7%増加、
売上総利益は24億7,400万、YoY2.6%増加、
これらの結果、営業利益は3億8,900万、YoY20.5%増加となりました。

注目いただきたいのは売上総利益率です。
当2Qは47.2%、前年2Qが47.3%ですので、ほぼ横ばいです。
以前からご説明している通り、当社は機械翻訳を使った翻訳による粗利率の向上を
重要戦略としてここ数年取り組んでおり、その成果も十分に表れ始めています。

利益率を増やすことによってでてきた価格（利益）マージンを売上に転嫁すべく
積極的な価格戦略を一部の顧客に対しておこなった結果、
当2Qの売上総利益率はYoY横ばいとなりましたが、
機械翻訳を活用するという戦略は順調に進捗しています。

4. セグメント別売上高

6

単位：百万円、%

	2022/3期		2023/3期			
	2Q	売上比	2Q	増減	伸率	売上比
翻訳事業	3,727	75.0	3,983	256	6.8	76.0
特許	1,124	22.6	1,329	205	18.2	25.3
医薬	1,448	29.1	1,350	△97	△6.7	25.7
工業・ローカライゼーション	871	17.5	1,002	131	15.0	19.1
金融・法務	284	5.7	300	16	5.9	5.7
派遣事業	610	12.3	556	△53	△8.7	10.6
通訳事業	325	6.5	421	96	29.6	8.0
コンベンション事業	95	1.9	86	△9	△9.2	1.6
その他	209	4.2	189	△20	△9.5	3.6
売上高合計	4,968	100.0	5,238	270	5.4	100.0

*その他には外国出願支援事業などが含まれます。

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2022年3月期第2四半期のセグメント別売上高についてご説明いたします。

翻訳事業は39億3,800万、YoY6.8%増加となりました。特許分野は13億2,900万、YoY18.2%増加と期初予想より大きく伸長しました。業界環境がよかったことに加え、先ほどご説明した、機械翻訳の活用で作った利幅を活かして価格戦略に打って出る施策が奏功していることも伸長の要因であると認識しています。

医薬分野は13億5,000万、YoY6.7%減少と、当初予想より悪い結果となりました。新薬開発関連資料を中心に受注していますが、一部の治験スケジュールに見直しが入り、その影響で予定されていた案件が入り切らなかったこと、副作用関連の案件（コロナ関連含む）の減少が要因と認識しています。一方で新薬開発部署の開拓は順調に進んでいます。

工業・ローカライゼーション分野は10億200万、YoY15.0%の増加となりました。大型案件受注の影響も大きいですが、製造業からの受注回復による積み上げも起因しています。自動車関連企業からの発注にも持ち直しの傾向が見られます。

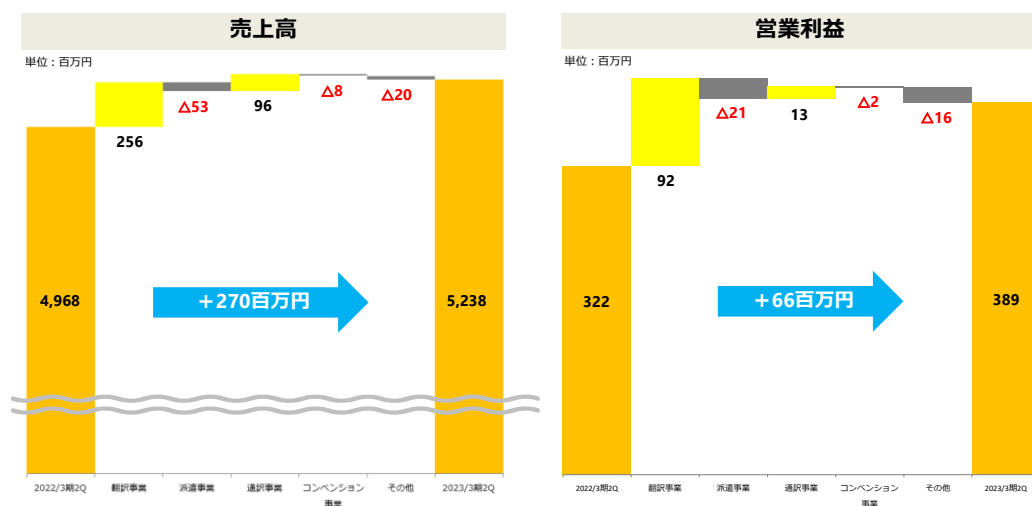
金融・法務分野は3億、YoY5.9%の増加となりました。IR関連文書の受注増加に加え、規程やリスク管理等のガバナンス系文書の受注も堅調に推移しました。

続いて、派遣事業は5億5,600万、YoY8.7%減少となりました。期初予想以上に苦戦している状況です。足元の引き合いは回復基調にありますが、依然として案件とスタッフのマッチングが課題となっています。

続いて、通訳事業は4億2,100万、YoY29.6%増加となりました。予想以上に回復が進んでいます。訪日に関する規制緩和により監査対応やIR関連の案件が増加しております。

最後に、コンベンション事業は8,600万、YoY9.2%減少となりました。依然として厳しい状況が続いており、回復の兆しは見ておりません。

5. セグメント別動向 (YoY比較)



* 営業利益グラフはセグメント間取引消去、ならびに、のれん償却は含めておりません

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.

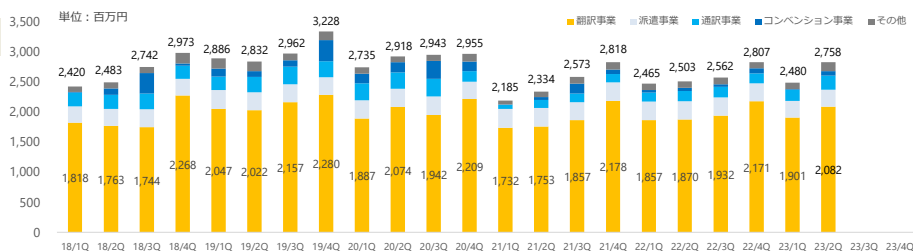


こちらのスライドでは、
2022年3月期第2四半期のセグメント別動向についてご説明いたします。

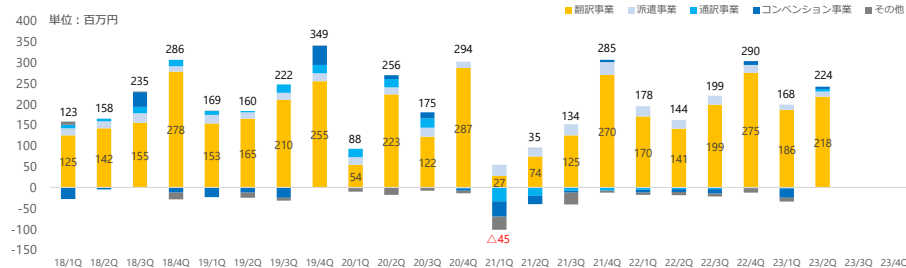
これらは売上高と営業利益を事業別にYoYで比較し、増減幅を示したグラフです。売上については翻訳事業の伸びが最も大きく、通訳事業も伸長していますが、一方で他3つのセグメントがマイナスとなっています。営業利益も売上と同じ傾向にあります、翻訳事業の増益幅が大きくなっています。

6. 四半期推移

売上高



営業利益



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドは

四半期の業績推移をセグメント別に示したものです。

まず売上高のグラフをご覧ください。

23/2Qの連結売上高は27億5,800万であり、コロナ前の20/2Qが29億1,800万ですので、コロナ前の水準にまでは回復していません。

一方、翻訳事業（オレンジ色）の売上高は、23/2Qは20億8,200万、コロナ前の20/2Qは20億7,400万ですので、ほぼコロナ前の水準に戻っています。

次に営業利益のグラフをご覧ください。

売上高と同様、23/2Qとコロナ前の20/2Qとを比べると、

連結と翻訳事業いずれもコロナ前の水準に届いておりませんが、

上期累計ではコロナ前の水準を越えており、利益は回復傾向にあると認識しています。

本日のご説明内容

9

I. 2023年3月期第2四半期 業績

II. 事業戦略と進捗

III. 2023年3月期 見通し

では次に、事業戦略と進捗をご説明いたします。

1. 第5次中期経営計画 基本方針と重点施策

10

基本方針

ビジネス環境の変化やデジタル化の進展に対応しつつ、業界・ドキュメント別に最適化された言語資産の活用モデルを確立し、対象市場でのプレゼンスを高め、持続的な成長を実現する。

重点施策

ドキュメント集約メカニズムの構築

- ドキュメント軸による新たな専門特化領域の育成
- 顧客体験価値向上・案件集約の仕組みづくり

ドキュメント別言語資産活用モデルの確立

- ドキュメント別モデル作成によるMT（機械翻訳）精度の向上
- プロセス改善による生産効率の向上

働き方改革や事業変革を支える経営基盤の整備

- 働き方改革などのニューノーマルに対応した労働・職場環境の実現
- IT人材・技術への積極的な投資と事業変革を支える経営基盤の整備

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、新たに策定した第五次中期経営計画についてご説明いたします。

基本方針は

「ビジネス環境の変化やデジタル化の進展に対応しつつ、業界・ドキュメント別に最適化された言語資産の活用モデルを確立し、対象市場でのプレゼンスを高め、持続的な成長を実現する。」です。

重点施策の3点のうち1点目の「ドキュメント集約メカニズムの構築」と2点目の「ドキュメント別言語資産活用モデルの確立」は、専門特化して高品質なサービスを安定的に提供するという当社の強みをさらに推し進めていくための戦略です。

具体的な戦略については後ほどご説明します。

重点施策の3点目「働き方改革や事業変革を支える経営基盤の整備」について、目下進めているのはテレワークの恒久化です。当社事業は比較的、テレワークを導入・継続しやすい業態であることから、今後もテレワークを積極活用し、生産性の向上とオフィス費用の削減を図ります。

それでは次のページで重点施策の1点目と2点目の具体戦略についてご説明いたします。

2. 重点施策 ドキュメント集約メカニズムの構築

11

サービス事例（医薬分野）

翻訳サービス

基礎研究から製造販売後まで、各ステージで発生するあらゆる資料に対応
資料間の相互の関連性に配慮した品質管理を行うことで医薬品開発資料の集約化を図る



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、新たに策定した第五次中期経営計画の重点施策であるドキュメント集約メカニズムの構築についてご説明いたします。

まずドキュメント集約メカニズムの構築を医薬分野を例にご説明します。この図は新薬開発時ほどの製薬会社でも作成しているドキュメントを類型化したものです。

まず基礎研究、臨床研究など、いわゆる動物実験の計画や結果の報告書が作成されます。その次の段階で臨床試験、人を使った試験の際は治験実施計画書が作成されて、その承認を得て治験が行われ、のちに治験実施報告書が作成されます。そしてこれらの情報が承認申請の時にCTDという形でまとめ上げられます。承認がおりた後、薬が販売されてからは副作用情報を継続的に収集する義務があるため、副作用関連文書も作成されます。これらが新薬開発を取り巻くドキュメントの一連の流れとなります。

これらのドキュメントは内資系の製薬会社ですと日本語から英語に翻訳しますし、外資系の場合は日本語に翻訳した海外の治験データを素に日本国内で治験をしますので、そこでもドキュメントが発生します。

では翻訳においてドキュメントを集約するということはどういうことかを簡潔に述べますと、新薬開発の流れで生じる翻訳を当社に発注いただき、当社でドキュメントを管理したいということです。ドキュメントの集約における当社のメリットは、売上と品質の安定です。加えて付加価値サービスの提案もできるようになります。売上への貢献が高い、メリットのある施策です。

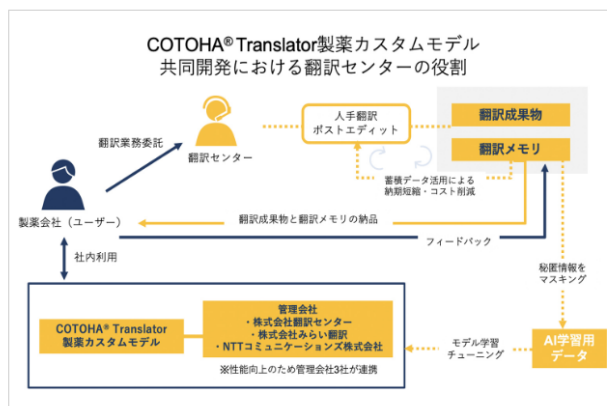
一方、顧客のメリットは2つあります。第一に納期短縮とコスト削減を実現できることです。外資系を中心に新薬開発スピードの短縮化に向けた動きが積極的にあるなかでドキュメントの集約により翻訳にかかる時間を極力縮めていくことが可能になりますし、同時にコスト削減も期待できます。もうひとつは品質の安定化です。臨床試験以降は情報を引き継いでドキュメントをまとめあげるため、ドキュメント間で用語の整合性を取ることが品質に直結します。品質の安定にはドキュメントを集約して発注していただくことが不可欠です。

それでは、なぜ納期短縮、コスト削減、品質の安定を実現できるのでしょうか。当社は言語を資産化するノウハウ、システムを構築しているからです。当社が持つ、言語を資産化するノウハウやシステムについて、次のページでご説明いたします。

2. 重点施策 ドキュメント別言語資産活用モデルの確立

12

- ・臨床試験関連文書に特化した製薬業界向けAI翻訳「製薬カスタムモデル」の共同開発
- ・導入企業数：22社（2022年9月末）
- ・導入後の新業務スキームにより、翻訳品質の安定、コスト削減、納期短縮を実現



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、新たに策定した第五次中期経営計画の重点施策であるドキュメント別言語資産活用モデルの確立について「製薬カスタムモデル」を例にご説明いたします。

各製薬会社から拠出いただいたコーパス（原文と訳文が対になったデータ）をもとに非常に精度の高い機械翻訳を開発し、コーパス提供企業にのみ提供しています。このサービスによりモデル導入企業での翻訳品質の安定、コスト削減、納期短縮を実現しています。

我々の狙いは機械翻訳を導入いただくことではなく、機械翻訳の導入によりドキュメントの集約化を実現することにあります。よって同モデルを契約いただいた企業には人手翻訳の集約化を提案しており、実際に他社から当社に発注先を切り替えてくださった顧客もいらっしゃいます。開拓は順調に進んでいます。

この仕組みを実現するのに必要不可欠なシステムが2つあります。ひとつは機械翻訳です。当社にはみらい翻訳という、機械翻訳の開発パートナーがいます。これは他の翻訳会社にはない強みです。

もうひとつは翻訳支援ツール（CAT）です。CATはいわば機械翻訳をプロ翻訳者が使う時のプラットフォームとお考えください。CATには翻訳メモリ（過去案件をデータベース化したもの）と機械翻訳が組み込まれており、プロ翻訳者は、CATが示す原文との一致度を見ながら翻訳メモリが示す訳文を利用するか、機械翻訳が出力する訳文を手直しかを判断します。翻訳メモリの管理も言語資産管理ノウハウのひとつとなっています。

CATは世の中に多く存在し、翻訳業界ではマニュアル翻訳時に当たり前のように使われるシステムですが、医薬翻訳や契約書翻訳等、マニュアル翻訳以外の分野でCATを使う習慣は日本の翻訳会社ではほとんどありません。ですが、我々は機械翻訳が登場する前からCATの利用拡大を目指し、登録翻訳者の協力を仰ぎながら、CATの活用を推進してきました。

繰り返しますが、CATツール自体は目新しいものではありません。ですが、マニュアル以外の翻訳者でもCATが使いこなせる環境を構築した翻訳会社は、おそらく当社規模だと日本国内でも皆無だと思っています。これも他の翻訳会社にはない強みです。

当社の優位性をまとめますと、専用の機械翻訳を非常に自由な環境で作成できること、CATを多様な分野で使いこなすことができること、の2つです。いずれも他の翻訳会社がすぐ模倣できるようなことではないと認識しています。これらの強みを武器に顧客内シェアの拡大を図っています。

さらに我々は医薬分野以外でもこの「製薬カスタムモデル」と同じコンセプトで言語資産の活用を提案しようと考えています。次のページで足元の取り組みを一例、ご説明いたします。

2. 重点施策 フォーカス市場への取り組み事例

13

IR資料（有価証券報告書）に特化した翻訳サービスの開発・提供について*

背景

- ・英文開示が求められつつも、翻訳に要する期間・費用・開示担当者の負担が課題
- ・特に有価証券報告書については、英文開示が進まない傾向がある



狙い

両社共同で先行サービス（パイロットプログラム）を提供し、顧客課題の最適解となるサービスを開発・育成することで、開示資料の集約化を図る

*2022年11月17日発表の共同プレスリリースより

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
フォーカス市場への取り組み事例についてご説明いたします。

こちらは11月17日付プレスリリースで発表した、言語の資産化の応用例です。
IR資料にはドキュメント間の同一性や経年での類似があることに着目し、プロネクサス社と共同でサービスを開発することとなりました。IR資料のなかでも特に英文化が求められている有価証券報告書（以下、有報）にターゲットを絞って展開します。

このサービスの訴求ポイントは翻訳の高速化とコストの低減です。
「製薬カスタムモデル」では複数の製薬会社から拠出いただいたコーパスを素に専用モデルを開発しましたが、このサービスでは、IR資料の特性であるドキュメント間の同一性や経年での類似性を利用し、各事業会社から拠出いただくIR資料からコーパスを作成することで、個社別の専用モデルを開発していきます。それにより「製薬カスタムモデル」同様、時間短縮とコスト低減を目指します。

またこのサービスは経年実施によって効果が表れるため、複数年で受注しないと意味がありません。その点において、ディスクロージャー・IR支援サービスを幅広く展開されているプロネクサス社と組むほうが当社単独で動くよりも自然な形で複数年契約を取っていけるだろうと考えています。

ここまでの私の説明をお聞きになって、経年で一致する表現とそうでない表現が出てくるというのはIR資料の特性として当たり前だ、と思われることでしょうか。しかし前年と違うところを見つけて、そこだけを機械翻訳を使いながらスピーディに翻訳できるノウハウを持つ翻訳会社はそう多くはありません。ですが、当社にはそのノウハウがあります。当社には機械翻訳やCATを活用できる環境があり、IR翻訳を専門とし、かつ、機械翻訳を使いこなせる翻訳者も擁しているという強みがあります。

当社は「製薬カスタムモデル」の共同開発で得た、ドキュメントに特化した機械翻訳の活用策をさらに推し進め、ドキュメント別の言語情報の資産化に注力してまいります。

3. 第5次中期経営計画 業績目標

14

重点施策の遂行を通じ、さらなる成長と収益性向上を追求

■業績目標

単位：百万円、%

	2022年3月期 実績	2025年3月期 目標	増減	伸率
売上高	10,337	12,100	1,763	17.0
営業利益	811	1,100	289	35.6
当期純利益	573	750	177	30.8

■経営指標

	2022年3月期 実績	2025年3月期 目標
連結営業利益率	7.8%	9.0%
自己資本利益率 (ROE)	11.9%	12.0%

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、新たに策定した第五次中期経営計画の業績目標についてご説明いたします。

第五次中計の重点施策を着実に遂行することにより、さらなる成長と収益性向上を追求していきたいと考えています。

2025年3月期の売上目標は121億、営業利益は11億、当期純利益は7億5,000万、経営指標として連結営業利益率9.0%、ROE12.0%を掲げています。

本日のご説明内容

15

I. 2023年3月期第2四半期 業績

II. 事業戦略と進捗

III. 2023年3月期 見通し

最後に、2023年3月期の見通しについてご説明いたします。

1. 2023年3月期 業績予想

16

期初予想に対し、営業利益、経常利益、当期純利益を上方修正（11/10）

単位：百万円、%、円

	2022/3期	2023/3期（予）	増減	伸率
売上高	10,337	11,100	762	7.3
営業利益	811	910→ 960 +50	149	18.3
経常利益	841	920→ 960 +40	119	14.1
親会社株主に帰属する 当期純利益	573	620→ 650 +30	77	13.4
1株当たり純利益	172.14	185.98→ 194.92 +8.94	22.78	13.2
1株当たり配当金	40.0	45.0	—	—

*2023年3月期予想の為替レートはUS1ドル=135.00円に修正しております（期初予想はUS1ドル=120.00円）

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2023年3月期の通期予想についてご説明いたします。

当社は本年11月10日に期初予想の上方修正を発表しました。
表内の太字が上方修正後の数字となります。

2023年3月期の通期予想は
売上高が111億、YoY7.3%増加、
営業利益が9億6,000万、YoY18.3%増加、
当期純利益が6億5,000万、YoY13.4%の増加を予想しています。

2. セグメント別売上高 予想

単位：百万円、%

	2022/3期		2023/3期 (予)	増 減	伸 率	売上比
		売上比				
翻訳事業	7,828	75.7	8,500	672	8.6	76.6
特 許	2,316	22.4	2,540	223	9.7	22.9
医 薬	2,904	28.0	3,100	196	6.7	27.9
工業・ローライゼーション	2,028	19.6	2,220	191	9.5	20.0
金融・法務	580	5.6	640	59	10.3	5.8
派遣事業	1,212	11.7	1,270	57	4.8	11.4
通訳事業	655	6.3	720	64	9.9	6.5
コンベンション事業	220	2.1	180	△40	△18.5	1.6
その他	420	4.2	430	9	3.9	3.9
売上高合計	10,337	100.0	11,100	762	7.3	100.0

*その他には語学教育事業および外国出願支援事業などが含まれます。

こちらのスライドでは、
2023年3月期の事業別売上高予想についてご説明いたします。

事業セグメントおよび分野で進捗の濃淡がでていますが、
売上高予想は2022年5月発表の期初予想を据え置いています。

3. 損益計算書 予想

18

単位：百万円、%

	2022/3期		2023/3期 (予)			
		売上比		増 減	伸 率	売上比
売上高	10,337	100.0	11,100	762	7.3	100.0
売上原価	5,429	52.5	5,830	400	7.3	52.5
売上総利益	4,907	47.4	5,270	362	7.3	47.5
販売費及び一般管理費	4,096	39.6	4,310	213	5.2	38.8
営業利益	811	7.8	960	149	18.3	8.6
営業外損益	29	0.2	0	△29	—	—
経常利益	841	8.1	960	119	14.1	8.6
特別損益	△2	—	0	2	—	—
親会社株主に帰属する当期純利益	573	5.5	650	77	13.4	5.8

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.

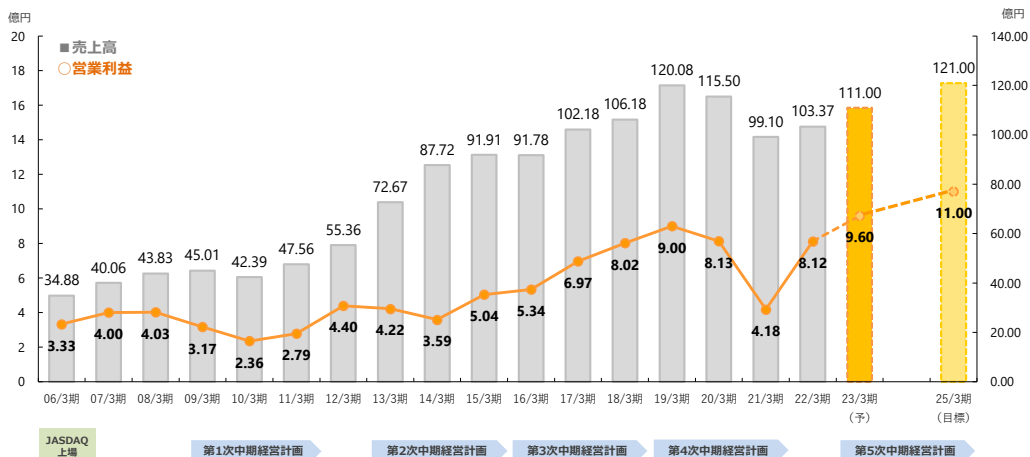


こちらのスライドでは、
2023年3月期の損益計算書予想についてご説明いたします。

先のスライドでもご説明した通り、売上は111億で予想しています。
足元の進捗を鑑み、売上総利益と販管費を期初予想から見直しました。
その結果、営業利益の予想を9億6,000万に上方修正しています。

4. 業績推移

営業利益は着実に回復、23/3期は過去最高益の達成を目指す



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.

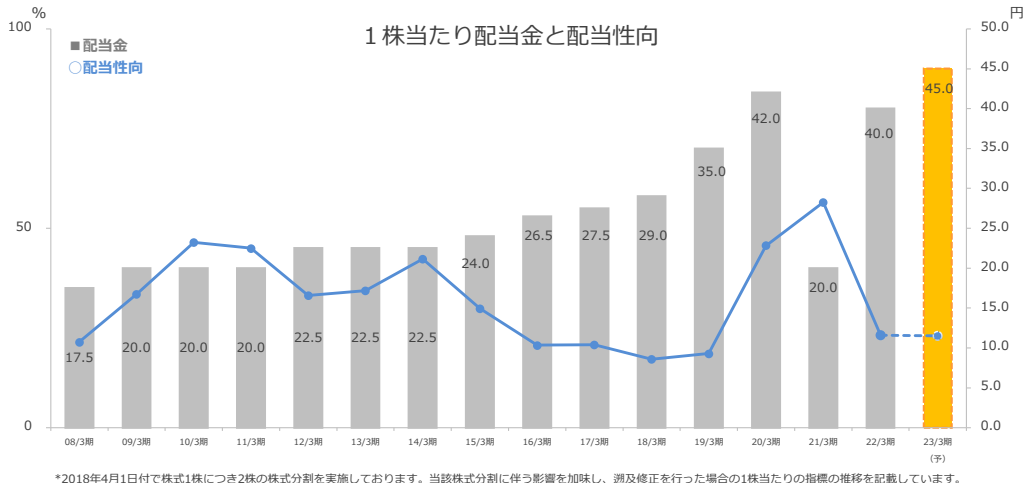


こちらのスライドでは、
業績推移についてご説明いたします。

売上はコロナ前の2019年3月期の水準には及びませんが、
営業利益は着実に回復しております。
2023年3月期は過去最高の営業利益達成を目指しています。

5. 株主還元

23/3期の配当は1株当たり45円を予想（前期比+5円）



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、株主還元についてご説明いたします。

当社はこれまで減配することなく、わずかでも増配することを念頭において事業を運営してきました。21/3期はコロナの影響によりやむなく一時的な減配を了承いただきましたが、2022年3月期は40円に戻しました。2023年3月期は過去最高の利益を予想しておりますので、配当額も1株当たり45円と過去最高水準を予想しています。

以上で私からのご説明を終了いたします。ご清聴ありがとうございました。

【参加者からのご質問】

Q1：IR資料（有価証券報告書）に特化した翻訳サービスの共同開発について、御社のビジネスチャンスはどれくらいあるか、また目標社数についてご説明いただきたい。
 A1：プライム上場企業には英文開示が義務化されているものの、現状の開示状況は不十分な水準にあります。ただ現在非開示でも開示に意欲的な企業もあるため、需要が膨らむだろうという期待感があります。当社でもIR資料の翻訳需要は増えていますので、プロネクサス社と組むことでさらに取引は拡大すると考えています。目標社数については、現在調査中であることから回答は差し控えますが、相当数の上場企業に興味を持っていたらサービスだと期待しています。また我々も翻訳者の調達や育成に早急に着手する必要があると考えています。

Q2：御社の企業価値を向上させていくために、何が一番の課題だと考えますか。
 A2：コアビジネスである翻訳事業での利益成長がグループ全体の価値を決めていくと考えています。目下の課題は成長率だと認識しています。当社は1986年の設立以降、比較的安定したなかで事業を展開していますが、一方で急速な成長がしづらい事業であることも事実です。安定成長、労働集約型ビジネスにおいて、どのようにして成長性を確保するのか、その重要な手段のひとつにM&Aがあると考えます。この先、有望な機会が訪れましたら、それをしっかりとつかみ取りたいと考えています。

参考資料

1. 事業セグメントおよびグループ会社 一覧

22

	翻訳 事業	通訳 事業	派遣 事業	コンベンション 事業	その他
翻訳センター	●				●
アイ・エス・エス		●	●	●	●
外国出願支援サービス					●
パナシア	●				
HC Language Solutions, Inc.	●				
メディア総合研究所	●				

*2015年4月設立のランゲージワン（株）（多言語コンタクトセンター事業）は持分法適用会社につき、事業セグメントには含まれておりません。

*（株）アイ・エス・エスは2020年4月1日付で語学教育事業を展開する（株）アイ・エス・エス・インスティテュートを吸収合併しています。

*語学教育事業は、量的な重要性が低下したため2022年3月期4Qより報告セグメントから除外し、その他として記載する方法に変更しています。

2. 連結業績推移

23

	2017/3期	2018/3期	2019/3期	2020/3期	2021/3期	2022/3期
売上高（百万円）	10,218	10,618	12,008	11,550	9,910	10,337
経常利益（百万円）	699	812	905	822	465	841
親会社株主に帰属する当期純利益（百万円）	444	566	630	304	117	573
資本金（百万円）	588	588	588	588	588	588
発行済株式総数（株）（*1）	1,684,500	1,684,500	3,369,000	3,369,000	3,369,000	3,369,000
純資産額（百万円）	3,477	3,939	4,350	4,545	4,524	5,090
総資産額（百万円）	5,111	5,741	6,486	6,222	6,295	7,172
自己資本比率（%）	68.0	68.6	67.0	73.0	71.8	70.9
売上高経常利益率（%）	6.8	7.5	7.4	7.0	4.7	8.1
従業員数（人）（*2）	413	518	507	522	509	520
登録者数（人）（*3）	4,428	4,221	2,889	3,030	3,249	2,681

*1 2018年4月1付で普通株式1株につき2株の株式分割を実施

*2 連結正社員数

*3 翻訳センター単体登録者数、19/3期より算出方法を一部変更

3. 事業別業績推移

24

単位：百万円

	2017/3期	2018/3期	2019/3期	2020/3期	2021/3期	2022/3期
翻訳事業	7,035	7,593	8,506	8,112	7,520	7,828
特許	1,824	1,880	2,139	2,258	2,100	2,316
医薬	2,445	2,744	2,897	2,749	2,875	2,904
工業・ローカライゼーション	2,020	2,239	2,725	2,472	2,038	2,028
金融・法務	745	729	744	632	505	580
派遣事業	900	1,127	1,192	1,200	1,228	1,212
通訳事業	783	933	1,039	1,022	477	655
コンベンション事業	1,107	496	677	782	298	220
その他	390	466	592	432	385	420
売上高合計	10,218	10,618	12,008	11,550	9,910	10,337

4. 損益計算書 推移

25

単位：百万円、%

	2017/3期		2018/3期		2019/3期		2020/3期		2021/3期		2022/3期	
		構成比		構成比		構成比		構成比		構成比		構成比
売上高	10,218	100.0	10,618	100.0	12,008	100.0	11,550	100.0	9,910	100.0	10,337	100.0
売上原価	6,026	58.9	6,112	57.5	6,999	58.2	6,625	57.4	5,536	55.9	5,429	52.5
売上総利益	4,191	41.0	4,506	42.4	5,009	41.7	4,925	42.6	4,373	44.1	4,907	47.4
販売費及び一般管理費	3,494	34.2	3,704	34.8	4,108	34.2	4,111	35.6	3,955	39.9	4,096	39.6
営業利益	697	6.8	802	7.5	900	7.4	813	7.0	418	4.2	811	7.8
営業外収益	5	0.0	10	0.0	5	0.0	10	0.1	49	0.4	40	0.3
営業外費用	3	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.0	2	0.0	10	0.0
経常利益	699	6.8	812	7.6	905	7.5	822	7.1	465	4.6	841	8.1
特別損益	1	0.0	12	0.0	50	0.4	△324	-	△193	-	△2	-
税金等調整前当期純利益	700	6.9	824	7.7	954	7.9	498	4.3	271	2.7	838	8.1
親会社株主に帰属する当期純利益	444	4.3	566	5.3	630	5.2	304	2.6	117	1.1	573	5.5
販売費及び一般管理費	3,494	100.0	3,704	100.0	4,108	100.0	4,111	100.0	3,955	100.0	4,096	100.0
人件費	2,537	72.6	2,653	71.6	2,878	70.0	2,926	71.2	2,786	70.4	2,984	72.8
人件費以外	957	27.4	1,051	28.4	1,230	30.0	1,185	28.8	1,169	29.6	1,112	27.2

5. 貸借対照表 推移

単位：百万円

	2017/3期	2018/3期	2019/3期	2020/3期	2021/3期	2022/3期
(資産の部)						
流動資産	4,632	4,668	5,220	5,213	5,515	6,311
固定資産	478	1,072	1,265	1,009	780	861
資産合計	5,111	5,741	6,486	6,222	6,295	7,172
(負債の部)						
流動負債	1,543	1,718	1,974	1,503	1,595	1,891
固定負債	90	83	161	173	175	190
負債合計	1,633	1,801	2,135	1,676	1,770	2,081
(純資産の部)						
I. 株主資本	3,449	3,923	4,332	4,531	4,514	5,068
II. その他の包括利益累計額	28	15	17	13	10	22
III. 少数株主持分	—	—	—	—	—	—
純資産合計	3,477	3,939	4,350	4,545	4,524	5,090
負債純資産合計	5,111	5,741	6,486	6,222	6,295	7,172

株式会社翻訳センター 経営企画室

TEL:03-6369-9963 E-mail:ir@honyakuctr.co.jp

URL : <https://www.honyakuctr.com/>

本資料は、業績に関する情報の提供を目的としたものであり、当社が発行する有価証券の投資を勧誘するものではありません。
本資料に掲載された意見や予測等は資料作成時点での当社の判断であり、その情報の正確性、完全性を保証し、または
約束するものではなく、また今後、予告なしに変更されることがあります。